図書館の論理

羽仁五郎の発言

●どこへ行くんだかわからん、というような性質の仕事なんだ、教育はね。図書館というものも、やはりそうなんだよね●明日のためにこそ、教育があり図書館があるのであり、教育や図書館の本質は進歩的なものだ●政権交代が必要なんだよ。政権交代ということを前提において、初めて国会図書館なり公共図書館が、思想上の差別を一切しないことができる●あらゆる差別はつねに知識の専制にもとづいていたが、いま独占資本の支配は知識の独占をくわだてている●人民主権は人民の無知のうえに確立されることはできないのである●国立国会図書館は、絶対、国会図書館と国立図書館を分けてはダメだ。↘

↘分ければ、国立図書館というものは文部省がやるようになっちゃうからね●子どもたちが本当に誰も助けてくれない闘いをやっている。それで我々が助けるといってもね、手を出して助けるという事のできるような段階じゃないね、わずかに残ってることはどういうことが残ってるかと言ったら、子どもの周りに本のある環境を作るってことぐらいしか、我々にはできないんじゃないかと思うんだよ●図書館は、暴力革命をふせぎ、平和革命を可能ならしめるものである●今、日本が財政上優先的に考えているのは、国防費だよね。しかし実際は、日本で優先的に考えなきゃならないのは図書館だろうと思う●

羽仁五郎

日外アソシエーツ

図書館の論理

羽仁五郎の発言

羽仁五郎

日外アソシエーツ

羽仁　五郎（はに・ごろう）

1901年，桐生市に生まれた。東大，ハイデルベルク大学に学んだ。1927年，日本大学史学科を創設，その歴史哲学および日本現代史の教授。1931年，『日本資本主義発達史講座』の立案および刊行に当った。1947年，参議院議員に当選（1956年まで），国立国会図書館設立を提唱，また参院法務委員として人権の確立に努力。1947年，日本学術会議会員に選出され，学問・思想・自由保障委員会を創立し，その初代委員長として活動した。

主著『ミケルアンヂェロ』『明治維新』『都市』『日本人民の歴史』『羽仁五郎歴史論著作集　全四巻』『都市の論理』『自伝的戦後史』『続・都市の論理』『教育の論理―文部省廃止論』ほか。

図書館の論理―羽仁五郎の発言

1981年6月30日　初版第1刷発行　　**定価2,500円**

著　者　羽仁五郎
発行者　大高利夫
発行所　日外アソシエーツ株式会社
〒143 東京都大田区大森北1―23―8　第3下川ビル
振替　東京0―47971　電話(03)763―5241(代)
発売元　株式会社　紀伊國屋書店
〒160-91　東京都新宿区新宿3―17―7
振替　東京9―125575　電話(03)354―0131(代)

©Goro Hani
Printed in Japan, 1981
組　版　奥村印刷　　製　本　松栄堂製本所
乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
ISBN 4―8169―0067―5

の手から公選の教育委員会の手にうつされた方向と平行して、日本の図書館を文部省の手から公選の国会の手にうつしたのである。その後、この新しい理論を理解できないひとびとのあいだに、国立図書館と国会図書館とを分離独立させようとする動きがたえないが、国会の民主主義自由主義の手をはなれた国立図書館が独立は外見だけで実質は文部省の官僚主義の支配の下におちいるのは、予見にかたくない。教育委員会の公選が廃止されて任命制が強行された後に、日本の教育がどんな荒廃におとしいれられたか、最近の教科書問題が露骨にこれを示している。日本の過去につながる勢力の主張するような古いタイプの教科書で教育される日本の青少年が、二十年後、三十年後に社会の中心に立つとき、その二十年または三十年の間に現状を一変した日本および世界の進歩にとって、いかに有害な、またはあわれな存在となるか、想像するだにおそろしい。

人類社会の時代の革命の必然は歴史が現実に証明しているところである。問題はいかにしてそれを平和革命として実現するかにある。この平和革命を否定しようとするものは、暴力革命を必然とする責任を自覚することができないのであろう。

図書館の唯一最大の使命は平和革命の実現にある。変化することできないものは、滅亡するよりほかないからである。

一九八一・五・二九

羽仁五郎

まえがき

理論は現状を一変させねばならない。真理が人間を解放するためには、それは人間を変えなければならない。

現在当面の問題は、過去の理論の結果なのだから、新しい理論を発見しなければ、現在当面の問題を解決することはできないのである。

この本は図書館について現状を一変させるためにのみ読まれる意義がある。

国立国会図書館の創立にあたり、その最初の館長の候補として、衆議院が書斎の文人姉崎正治を考えていたとき、参議院の図書館運営委員会が戦争反対すなわち治安維持法違反の獄中生活の体験をもつ哲学者中井正一を館長候補として参議院議長に報告したのは、たしかに日本のそれまでの図書館の理論を一変したものであり、衆議院はこの参議院の主張におどろいて、新しく出なおして、金森徳次郎を候補としてあげ、その結果、国立国会図書館の初代の金森館長、中井副館長が実現したことは、たしかに図書館についての日本のそれまでの現状を一変したものとして公認された。

国立国会図書館が国立図書館と国会図書館とを統一している理論は、日本の教育がそれまで長いあいだ文部省によって支配され、国家主義および軍国主義によって画一化され、ついに日本の侵略戦争およびその拡大そしてその結果としての無条件降伏にいたった問題をくりかえさないために、日本の教育が文部省

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

目　次

まえがき

わが図書館論――7
図書館への関心　9
国立国会図書館　16
図書館への提言　47

図書館人の使命――73
図書館人の天職―中井正一君にささぐ―　75
委員長報告・国立国会図書館法について
―参議院における国会図書館運営常任委員会委員長としての報告―　91
告別のことば―中井副館長の死を悼む―　96

〝思想〟に生きた七十三年—金森徳次郎氏を偲んで— 100
図書館員は進歩的であるべきだ 105

真理がわれらを自由にする —— 129

わが書斎—真理は吾等を自由にする— 131
国立国会図書館設立の主旨とその経緯(記念講演) 134
メッセージ(第二回図書館研究集会記録より) 152
第三回図書館研究集会に期待して 157
国立国会図書館の創立 159
紀元節と図書館 174
都市の論理と図書館の発展(記念講演) 182
文部省の支配下にない図書館 189

ヨオロッパの図書館を行く —— 201

ヨオロッパへ 203

ウィン市 206
プラアグにて 208
ドイツ 213
コペンハアゲン 224
ロンドン 227
ふたたびパリ 235
スイス 236
イタリア 239
ふたたびウィン 244
ソヴィエト同盟 246
ブダペシト 250
ふたたびイタリア、そして帰路 253
資料解説（山領　健二） 255

わが図書館論

聞き手

前国立国会図書館副館長

酒井　悌

麻布学園教諭

山領　健二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

羽仁五郎氏

図書館への関心

山領　羽仁先生が、図書館に関心をお持ちになったのはいつ頃からですか。

羽仁　僕が本当に図書館に興味を持ったのはね、やっぱり国会図書館に関係してからですよ。これは、この間『教育の論理—文部省廃止論』（ダイヤモンド社　一九七九年）という本を書いたんだけれども、教育というものは、未来が見えないようなものでなければ、本当の教育でない。未来が見えてしまうような教育じゃあね、やる人間もそんなに興奮しないし、それを受ける人間も、そんなに感動しない。聖書じゃないけれども、どこへ行くんだかわからん、というような性質の仕事なんだ、教育はね。図書館というものも、やはりそうなんだよね。それだから、多くの図書館論を読んで僕が一番がっかりするのは、「こういう図書館を作りたい」という風なことが、あんまり、きちんとできてるんだよね。最近図書館が、なかなか盛んになってきたことは、非常に喜ばしいんだが、図書館というものを、一定のビジョンに、こう、入れていくんだな。それはどうも本当の方法じゃないんじゃないか。だから僕もね、子どもの頃から図書館に興味を持っていたとか何とかいう話じゃなくね、図書館に本当に興味を持ったのは国会図書館に関係してからだということなんだ。つまり、国会図書館

山領健二氏

を作るので非常に苦労をして、その中で図書館というものはどういうものでなければならないかということをだんだん知ることができたというのが、本当だと思うんだよ。

山領　最近、日本図書館協会から出された一九八〇年の『図書館白書』で、日野市立図書館の話を読んだのですが、日野市立図書館では、まず最初に立派な建物を造るのではなく、とにかく図書費を非常に沢山かけて本をうんと買い揃えた。そうすると本がいっぱいあるから、その本をめあてに市民達がおおぜい来るようになる。さらに、そこへ来る市民たちが読みたいという本を片っぱしからリクエストに基づいて買う、ということをやるから一層利用は活発になってくる。図書費に重点的にお金をかけて成功しているという例、というよりは図書館の利用者である市民の関心を、図書館づくりの構想の基本の所で生かした例として、報告を興味深く読んだのですが、羽仁先生と国立国会図書館の場合、戦後の図書館構想に戦前の図書館利用者としての経験が反映するということはなかったのでしょうか。

羽仁　うん。自分は何も知らないんだなあ、という人間でなければ、いい仕事はできない。だから僕は、国立国会図書館に非常な感謝を捧げている、国立国会図書館が僕に図書館について教育してくれた、というのがきょうの本論ですがね。だけどね、その前に、何も知らないという状態がどうしてできたろうか。大体我々インテリだったら図書館について、何かのビジョンというようなものを持っている筈だよね、それを持ってないのはどういう理由かなっていうことを、ちょっと考えてみたんだが…。

生まれは市民的都市・桐生

僕の生まれたのは群馬県の桐生ですが、桐生っていうのは、日本で珍しい、城下町でない都市でね。江戸時代から工業都市、織物の都市なんだ。日本の封建時代とか近代とかいうことについて、いろいろな人がいろいろなことを言うが、例えば、ライシャワーなんかは、日本は封建時代でも非常に文化のレベルが高かったという風なことを言うんだよね。だから明治維新がうまく行き、その後もうまく行ったんだ、と言う。江戸時代にも寺子屋の数が、日本全国で一万近くあって、ちょっと想像できないほど一般教育が進んでいた、と言うんだが、これがくせ者でね。実は、その江戸時代の、一万近くあったっていう寺子屋は、サムライがつくっていたんじゃないんだな。百姓・町人がつくっていたものなんだよ。だから、封建時代でも日本の文化は相当のものがあったんだっていう、そういう非階級的というか非構成的というか、一つの社会というものを平面的に眺めちゃうのでなくね、社会の中には必ず対立があるわけで、その対立の上にたって考える、ということが必要なんだ。

島崎藤村の『夜明け前』なんていうのでもやっぱり、サムライの文化なのか百姓・町人の文化なのか、はっきりしないんだよね。それで、どういう所に矛盾があって、その矛盾はどういう所から来てたのかと分析しないから、『夜明け前』で主人公が最後に発狂しちゃう、その発狂の理由がわからないんだな。

僕の家なんかを考えてみるとね、子どもの頃、僕の母親が高山樗牛の『滝口入道』を、愛読してたんだ。僕の家にはずいぶん本があってね、その本の中には僕の父が足利から婿さんで来た時に持って来た本がかなりあるらしかった。それで婿さんに来た

相当な読書家だった祖父

時、僕の祖父が父に向って「お前、今まで詩を作ったりしてるようだが、もう、こっちへ婿さんに来た以上は、詩を作るより田を作れ」ということを言ったというんだが、僕の母が『滝口入道』なんかを読んでたというのは、祖父の影響だろうと思うんだね。祖父は父に向っては「詩を作るより田を作れ」なんて言うけれども、自分自身はどうも相当な読書家だったんじゃないか、と思うんだ。

それで、これは今まであまり考えなかったんだが、「日本の封建時代には相当文化が高かった」というのは、まあ、いい加減な考え方で、「日本の封建時代にも、日本の百姓、町人たちの間には相当の文化、高い文化が築かれていた」ということが本当じゃないかと思うんですね。だから、例えば横山健堂が書いた『日本教育史』という本はなかなか名著で、僕は岩波文庫かなんかに入れた方がいいと思うけど、ああいうのもね、非常な名著だけれど、今のような点の反省が十分じゃないんだね。例えば米沢の上杉鷹山が、非常に教育的に進んでいたとか何とかっていうのは、どうもやっぱり教育ってものを一定の型にはめるんだよ。だけどね、江戸時代の百姓町人は、教育というものはどういうもんだかということをまだ知らない、それをさがしているという段階なんだな。

だから高山樗牛の『滝口入道』も読んだろうし、それから家にはいわゆるお嫁に行く時のまあ性教育というか、セックス文学の本が沢山あったが、そういうものも読むし、それから僕の父が読んだ中に、津田左右吉の『古事記及日本書紀の研究』の先駆をなした、江戸時代の河村秀根という国学者の『日本書紀集解』なんていう本もある

最初の作品「恐ろしき一夜」

んですよ。河村秀根は、古事記・日本書紀の中に出てくる文句で実は中国の歴史の本に出てくる文句が非常に多いので、それを拾い出しているんですね。だから日本でそういう事実があったんじゃなくて日本で歴史を作るって時に中国の歴史を読んでその記事を取り入れたんだという風な、のちの津田左右吉につながるような、古事記・日本書紀の研究としてかなり高いレベルのところに立っていた。そいつを父が読んだりしていたんだ。

他にも、例えば村井弦斎の料理小説なんていうのもあった。なかなかいい考えなんだが、ほうぼうの奥さんに料理を教えるために、料理を小説にするんだな。小説の中に料理が出てくるもんだから、料理教育としては大変よくできている。小説だと思って読んでるといつの間にか料理が大変上手になるという、婦人雑誌に教えてやったらいいような名案だと、思うんだがね。とにかく実に雑多な本があったよ。

それで思い出したが、僕が小学生の頃、僕の兄貴たちが家で、個人雑誌っていうか、自分達でガリ版を刷って、雑誌を作っていた。それに、僕は小学校の四年か五年ぐらいじゃないかと思うんだが、お話を書いたんだよ。それがね、今でも覚えてるんだけれども、「恐ろしき一夜（ひとよ）」という題でね、非常にこわい一晩という…。あの頃っていうのは、日露戦争のすぐ後だからね。兵隊がテントの外で歩哨をやっていたら、動物だか化物だか敵だか、何だかわからないものに襲われるという、非常にこわかったという話なんだ。それを書いたら兄貴たちが「お前どこでこんな事を読んで、それを書いたのか」って言うんだよね。どこかで読んだんじゃなくて自分で考えたんだ。で、

聖書を買わされる

いくら「自分で考えた」って言っても兄貴たちは信用しないんだよね。「こんなおもしろい話をお前が自分で考える筈はない、どっかで読んだんだろう」と言うんだが、今から考えればそういう事があったっていうのは、子どもの周り中に本があった、ということだと思うんだよ。だから実際僕がどっかで読んだのかもしれないんだね。それから桐生で、もう一つ僕が、かなり重要だと思うのは、僕の小学校の友達に、キリスト教の教会の牧師の子がいたんだね。それが皆に聖書を売りつけるんだが、皆金がないから誰も買う奴がない。結局多少金があるのは僕なもんで、僕が買わされたんだね。で、買わされたから読んだわけだ。そういう活動っていうものはね、サムライの間からは起こってくるもんじゃない。第一、その頃には僕の家なんかでもキリスト教、ヤソ教になっていいかどうかってことは問題だよね。多少迫害をしのんで、親父が一生懸命売ってるんで、子どもも親父を助けるつもりで聖書を売る努力をやってたんでしょうがね。つまり、聖書を売れば県の教育長とか何かになれるっていうんじゃないんだ、かえって、聖書なんか売っては何にもなれない。そういう風に、迫害されて、何かになる事の妨げになるような形で聖書を売ってるっていうことね。『出エジプト記』でいえば、「出で行くところを知らずして、出で行けり」ということだね。何かになるというのは、役人になるとかだけでなくて、小説家、芸術家になる場合も同じだと思うんだよ。僕は、夏目漱石が文学博士を文部省がやると言った時に断ったのが、やはり非常に印象が強かったです。というのは、僕も、その頃文学博士っていうのは本当に、名誉じゃないかと思ってたね。やっぱり。それを夏目漱石が見事に粉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com